特集　危機管理

□阪神・淡路大震災から学んだもの

兵庫県北淡町町長　小久保　正　雄

(1) 発生

阪神・淡路大震災の被災地となった阪神・淡路地域では，特段の科学的根拠があったわけでもないのに，昔からこの辺りは地震が起こらないと決め込んでいた。地震が起こってから，淡路地域においても活断層が走っており，学者なども警告を発していたということが分かった次第である。

このような状況で，私たちの町においても防災計画，防災訓練などといっても，ほとんどが台風や高潮に備えたものが中心であって，地震に対してはまったく無防備の状態であの地震を体験することになった。

平成7年1月17日午前5時46分，地震の揺れは大きな地鳴りとともに縦揺れから始まり，その後横揺れに移った。この最初の縦揺れが住宅を「ペチャンコ」に倒壊させ，この中で多くの即死者を出した。

生まれてはじめて体験する激しい揺れがおさまり，辛うじて即時倒壊をまぬがれたわが家の惨憺たる内部を見ながら，私は隣室に寝ている妻に声をかけ，安全を確認してから一刻も早く戸外へ出ようと悪戦苦闘した。ありとあらゆる家財などが散乱し，ガラスは壊され，家の中なのに砂ぼこりが舞っていた。必死の思いで浴室の窓から脱出し，暗闇の中，私は懐中電灯を照らしながら役所へと急いだのであった。

いつも通っている道から行こうとしたが，知人の自宅が倒壊してガレキが道路をふさいでいて通れず，第2の道もガレキと振り落とされた瓦で通れず，第3のルートを取って午前6時15分頃，ようやく役場にたどり着いたのであった。普段なら3分で来れるところを10分余りかかったことになる。役場庁舎の中は，半数近くのロッカーが倒れていたのを除くと無事であった。同一方向に倒れたロッカーは，横揺れの方向を示していた。

午前6時30分，震源地北淡町は災害対策本部を設置した。

私の生涯で最も長い1日が始まった。

(2) 救出

真冬の6時半はまだ真っ暗だった。その中にひときわ明るさが目立つ役場庁舎目指して多くの町民が集まり始めた。腕にタオルを巻いた血だらけの人。破れたパジャマ姿の人。毛布を頭から被った人。みんな口々

に地震の恐怖と被害の大きさに，興奮したり打ちのめされたりしていた。

役所に出動以来，県当局と連絡を取ろうとしたが，ようやく午前9時になって淡路県民局と電話が通じ，私は直ちに自衛隊の出動方を知事に要請した。午前 11 時頃，姫路駐屯の特科連隊からヘリコプター2 機が飛んで来てくれた。隊長の勧めに私も同機に乗り，低空からわが町の惨状を見てまわった。

写真１　救出活動する消防団員（１月17日，北淡町富島）

『わが町は死んだ。』これが私の，その時の印象であった。何もかもが破壊されているように思えた。

その一方でガレキの町の中では，消防団員たちはハッピを着て被災者を助けるために外へ飛び出し，住民はあの衝撃の中でプロパンガスのバブルの元栓を閉めて家の外へ逃げ出していたのである。ボヤも数件あったが，野島地区の一件を除いて大事に至らないうちに居合わせた人達が力をひとつにして消し止めていた。倒壊家屋の下敷きや生き埋めになっている300人近い人達を，広域消防職員・消防団員や町内会の役員，近所の人達がいっしょになって，最短距離と最短時間で到達し，倒壊で即死状態になった人達を除いて，全員無事に救出することが出来た。これは私の北淡町が古い歴史を持つ漁業中心の町で，地縁血縁のつながりが非常に強く，「あの家のおじいさんは，奥の八帖の間に寝ている。」というようなことまでお互いに知っている。みんなが顔見知りである，という顔見知りコミュニティが普通であったということである。

17 日の夕方には，死亡者全員 38 人の確認が取れ，その他全ての安否確認が終わった。

この素早い死亡者と行方不明者の確認によって，いろいろな事後の作業がどれ程やり易くなったかわからない。

17 日当日は，避難所を 19 箇所開設。その後，15 箇所に集約。町民の 3 分の 1 に当たる 3,600 人が避難した。翌 18 日の午後 3 時には，役場に隣接する町民センターで 38 人の犠牲者の合同葬儀を行った。

救出救援の初動期において，私が特に気を遣った事柄について，以下数点記してみたいと思う。

(3) 救援

想像を絶する惨状を目のあたりにして，私は，ガレキとなった膨大な量の倒壊家屋の早期撤去は，自衛隊に頼る他ないとバラを決めた。

もちろん彼等は，道路等に倒壊したガレキの撤去，給水，給食，入浴等の作業やサービスはよくやってくれていた。それらは，

災害出動した自衛隊の任務として正当に認められていた。しかし,倒壊した民家のガレキの撤去は,一般廃棄物という解釈で,これまでに例の無いことであった。

私は,日を追って視察調査に訪れた第3師団長,陸幕長,統合幕僚長等の最高幹部にこのことをお願いし続けた。しかし彼等の返事は異口同音に「町さん,我々も何とかしたいが,これは制服組ではどうすることも出来ない。政治の問題です。」というものであった。「村山さんが OK と言えばいいのですか。」と尋ねると「その通りです。」とのこと。

そこで私は,制服組の方に無理をいうのをやめて,その当時,2 日に 1 回の割合で視察に訪れていた各省大臣や次官,国会議員等に,何とかしてくれるよう,くりかえし頼みこんだ。亀井静香運輸大臣などは,町長室の電話で防衛庁長官に,「何とかしてやってくれ。」と頼んでくれた。そのような,私の必死の陳情が功を奏したのかどうかは知らないが,政府内部でもいろいろと話し合いがあったようで,やがて明確な方針を発表する,というわけにはいかないが,要するに被災地の首長と出動している自衛隊の責任者がよく話し合いをして,最上と思われる方法でやってもらいたい,というお達しが出された。私は,これを日本の伝統的便法主義的解決方法と,勝手に解釈し,四国善通寺の第2混成団長との間で覚え書を交わし,わが町では 2 月 6 日から民家ガレキの撤去が始まったのであった。

その次は,このたびの地震は,初めの頃,「兵庫県南部地震」と呼ばれていた。今もこれが正式の名称であることに変わりはない。と

写真 2　北淡町震災記念公園，野島断層保存館内

ころがしばらくすると,マスコミは一斉に「阪神大震災」又は「関西大震災」と呼び始めた。私は,これはえらいことになった,と不吉な予感さえ感じた。

こんどの大地震は,淡路島,特に北淡町の町はずれを震源地として起きた。事実私たちの町は,被災率において阪神地区を上まわる壊滅的な打撃を受けている。野島活断層も出現している。この地震の呼び名から,「淡路」という名前が消えたらどうなるであろうか。これが 5 年たち,10 年たったらどうなるか。きれいに「淡路」は忘れられてしまうだろう。

「震源地の町」などというのは決してプラス・イメージではない。しかし,忘れられてしまえば,これから政府が打ち出してくるであろう復旧・復興のためのいろいろな施策の対象地から除外される恐れだって出て来るのではないか。私は傑然とした。

これは絶対に「淡路」を入れるべきだ。そこで,県庁で行われた県下の災害対策本部長会議(被災地の市長町長兵庫県で構成)で私はこの問題を取り上げ,政府の現地対策本部長や県知事に強く訴えた。貝原知事は

早速，翌日から県の公式文書その他においては「阪神淡路大震災」と改めてくれた。

一方国に対しては，視察や調査に次々と本町を訪れていた大臣や国会議員，政府要人にこのことを訴えつづけた。野中自治大臣にもお願いした。その結果，閣議で「阪神淡路大震災」という名称に政府関係のものは統一することに決定された。かくしてこの地震は「阪神淡路大震災」と呼ばれるようになった。それからの年月の経過を見るにつけ，淡路を入れておいてもらってよかった。正解であった，と思い当たることが実に多い。お力添えをいただいた関係者の方々に心から御礼を申し上げたい。

第 3 は，1 月 17 日から始まった災害対策活動の中で，私はつねに役場の職員や消防団員に対して，こんな悲惨な状態の中で仕事をするんだから皆な明るくやろう，時にはダシャレでも飛ばせよ。と言いつづけた。

今まで誰もが体験したことのない大災害である。一般住民はショックで虚脱状態となっており，彼等の世話をする立場にある役場職員や消防団員達もみな被災者である。恐れ，ショック，緊張，疲労などが重なってムードが暗くなりがちであったが，私は努めて明るく快活に振る舞った。そして深夜になって災害対策本部に残っている人の数も少なくなった時，私は若い職員に命じて全壊した私の家から日本酒を取ってこさせた。前年の 10 月町長選挙勝利のお祝いに貰った酒が沢山残っていたのだ。その冷酒を紙コップで飲みながら，幹部や若い職員とダシャレを飛ばし，且つ語り合ったものであった。そして，役場の土間のカーペットの上でゴロ寝した。職員の間からは，「地震が起きてから役場の中のコミニュケーションがずいぶんよくなった。」という声もたびたび聞いた。また，その頃ずっと役場で陣取っていたマスコミの人達や，ボランティアや自衛隊の人達からも，「北淡町の役場は活気がありますね。」とよく言われた。

おかげで，今日の疲労（心身共の）を明日へ持ち越すことを少なくし，あの地獄の底のような状況の中で，明るさを失わず，元気に住民のために働くことが出来た，と思っている。

(4) 結び

阪神・淡路大震災で学んだことの 1 つは，大災害の直後の 1 時間や 2 時間は，とにかく住民が自分たちで助け合えるという，血の通った人間関係のあるコミュニティを作っておく事が大切だということである。

防災マニュアルに従って，普段から自衛隊や消防署や警察といかに密接な関係を築いていたとしても，大災害により彼等の駐屯地が被災している或いは，かけつける道路が破壊されていることだってあり得るのだ。

だから，先ず住民たちは自分達で助け合わなければならないのだ。

これが災害発生直後に求められる最大の「なすべきこと」なのではないだろうか。